

毎月お得意の1名様はサンビーム1,000円のお食事券をさしあげます。フェニックス編集室までハガキでどうぞ



サンビームであつたひと

■今月のお客様—— 福井市照手町の田代比呂子さんです

“自然の中で食事をしている
ようで、おいしいですね。
家族づれが多いみたい。”



サンビーム

緑水苑 22-4608

翠光苑 22-4923

福井ハイパス (阿蘇園地入口)

姉妹店・芦原温泉
スナック喫茶ニュー旭

ふくい文化史の人ひと

大新の詩人 館^{たち}高^か重^{しげ}

(一九〇四—一九三一)

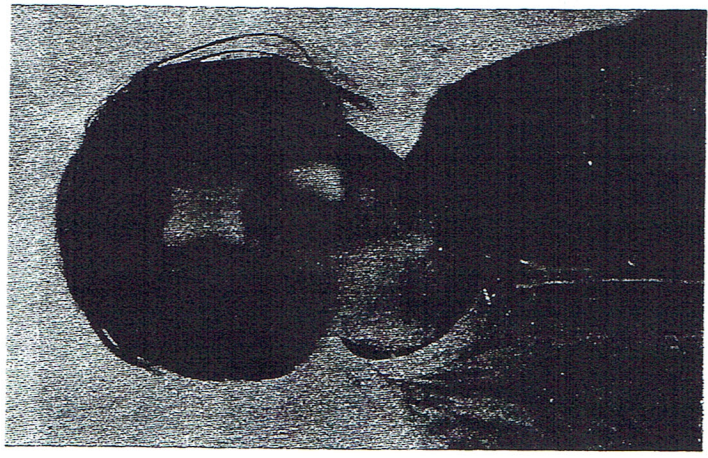
日向にゐる

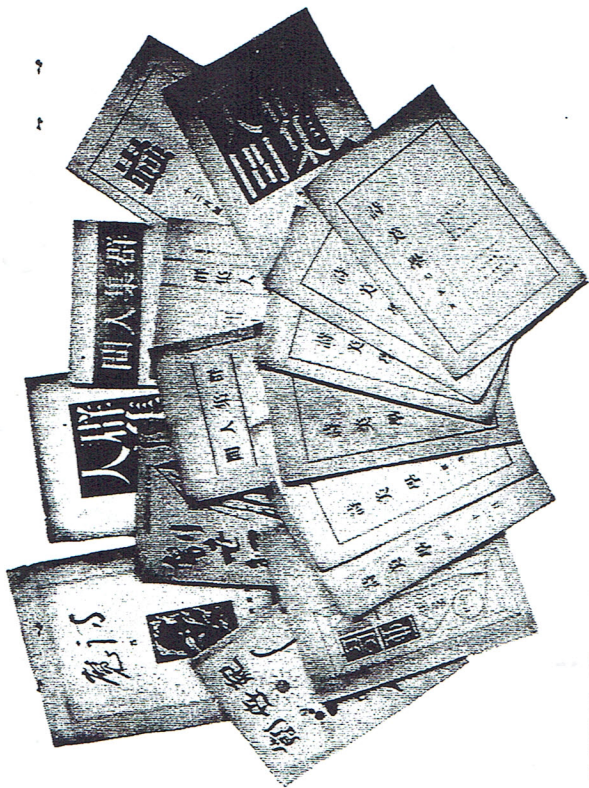
あつたかい日向にゐる。
向ふの山々を見てゐる。

山になりたい。
大きな山になりたい。

今日のわたくしは
泣けて なくて仕様がな

(昭和二年・館高重詩稿より)





館高重氏が若い生命を燃やして発刊した同人詩誌

青春の悲しい響

劉武三雄

明治の暁が透谷、藤村にあった様に、本県の場合は昭和二年にその契機があったのではなからうか。

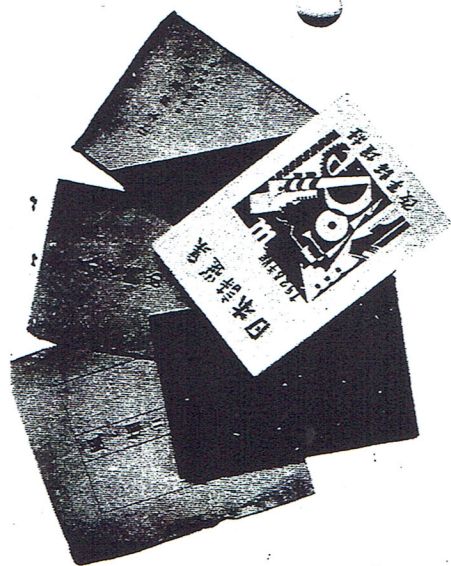
ロマンで、むんむんするものが響い吐息となり、本県の若き魂を揺すったのではないだろうか。

そして、館高重は其頃のもっとも新鋭なチャンピオンであった。

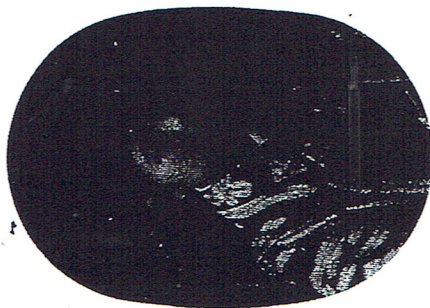
私の本県に来たのは遙かに後年の頃になるが、たちと言う姓が印象的であったし、岐高嶺を出たり、発病し、また彼の若き妻がさきに病臥して倒れる、そして彼も又短い月日の後、死を遂げる。それは昭和三年刊の「爪を眺める」の跋文で、「北國人の脈管から流れ出た純粋な血が脈々と漂っている」と庄山信太郎氏が叙べている。

昭和二年の「感情原形質」もよいもので、思えば当時の私なども秀れた詩の一行を得るために茫漠とした惑いのなかにいた。野風の如く疲せて、年少であった。

だから本県で、館夫妻の悲しい死や、城越健次郎氏の編んだものを見て、いかにも柔かい魂のような風貌の映像を捉えて、にあこ——にあこ……で始まる「恋猫」も如何にも朔太郎的なものに感じ入り、同じ魂のびきを感じた。



日本の近代詩に大きな業跡を残した詩人たちの作品を集めた「日本詩選集」



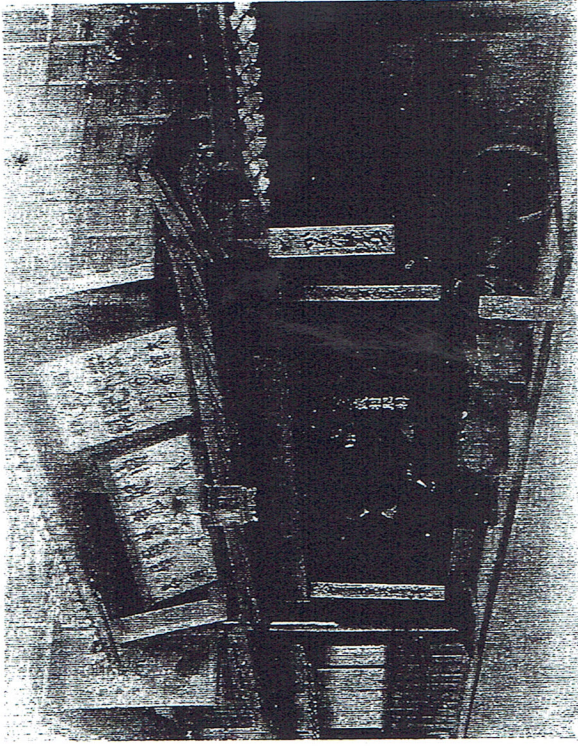
結婚わずか4ヶ月で他界した愛妻秋子さん

今、昭和二年、三年、~~本県~~の彼の詩稿の原稿紙をとちたものを見せられると、朽葉の様に抒情の魂は失われていない。

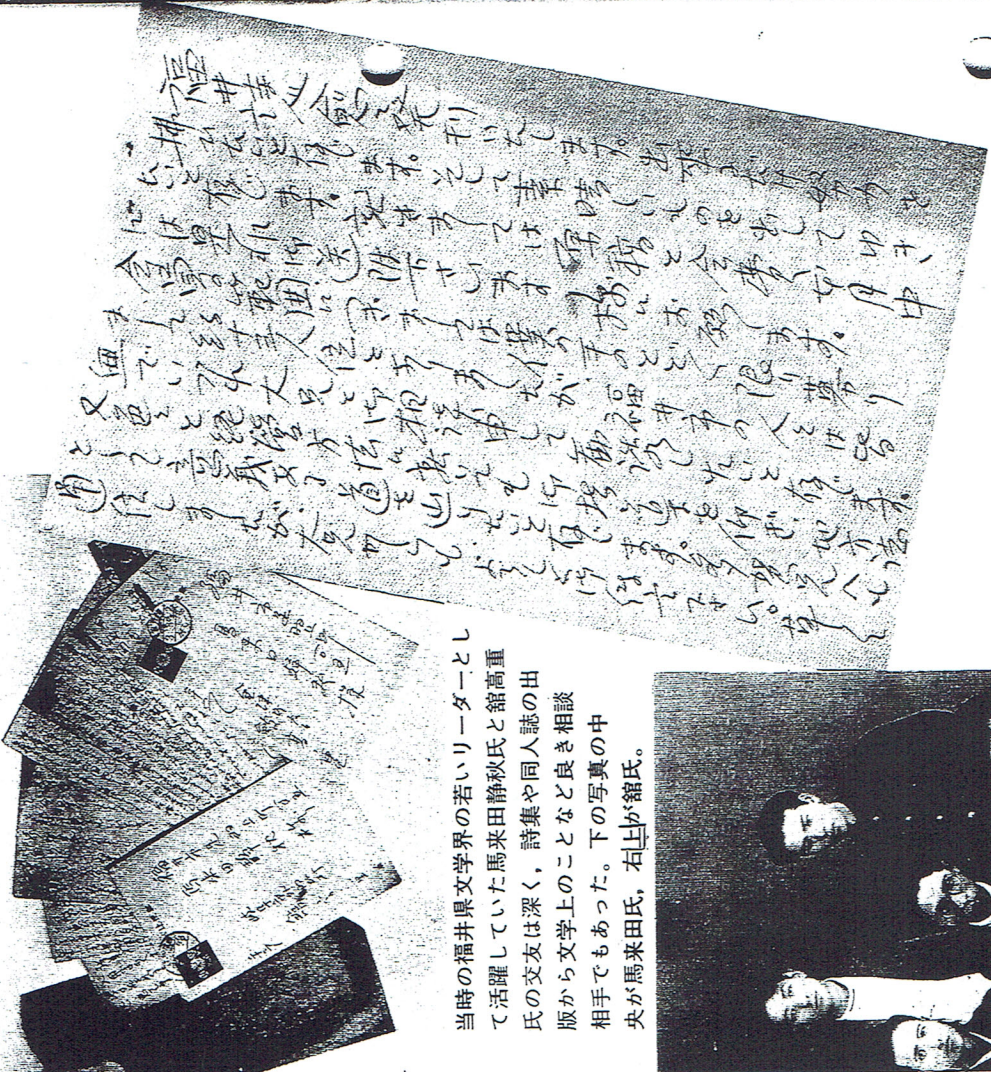
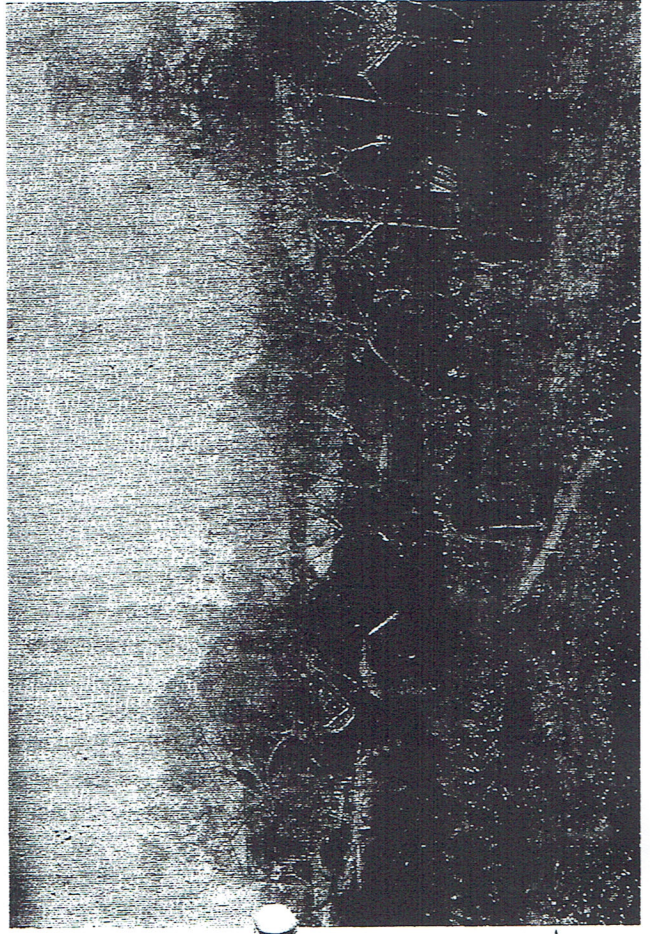
本県としては、ボードレルの「赤裸な心」やブローク詩集を訳した古河清、昭和四年発病、昭和六年二十七歳で病歿した館高重、どうしても本県文学のロマンと社会主義の勃興期の青春の声であった。昭和三年四月、北島秋子と婚姻、同年七月妻を喪う。

青春でなくてなんであろうか。文学を自分の生涯で編んだ。悲しい響である。

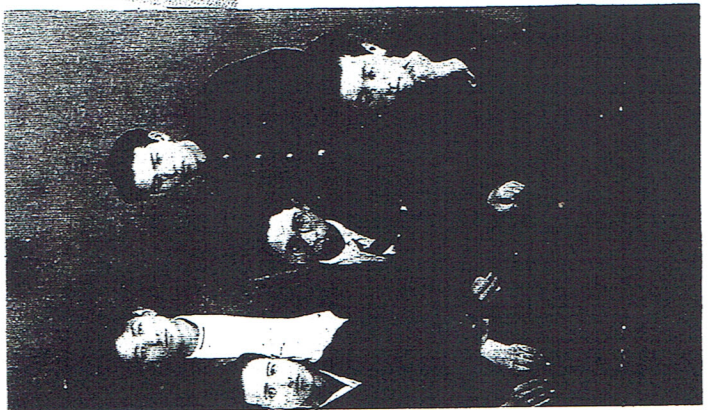




館高重の生家は、広大な田地を所有していた兼封家で閑静な住宅と、町内の表通りには、肥料と雑貨の店も持っていた



当時の福井県文学界の若いリーダーとして活躍していた馬来田静秋氏と館高重氏の交友は深く、詩集や同人誌の出版から文学上のことなど良き相談相手でもあった。下の写真の中央が馬来田氏、右上が館氏。



館 高重。
詩人。

一九〇四年（明治37年）誕生。

一九三一年（昭和6年）死去。

行年 27才

福井県坂井郡金津町に生まれる。

詩誌「ひとむれ」「フリジャ」

・「詩美学」「虫」を主宰。

詩集「感情原形質」「爪を眺める」「風と畑」などを刊行。

昭和3年、北川冬彦、草野平蔵、原明太郎らとともに『日本詩選集』に詩3篇が掲載される。

27才の早春の2月14日、肺結核のため病死。法名、釈 栄報。

詩集「感情原形質」

馬米田静秋氏の序文より

自分が物を言ふことは出しやばり過ぎるかも知れない。然し館は福井が生むだ可愛い詩人だ。自分と彼との友誼は彼が処女詩集の出版に際して何うして手を拱ぬいてゐることが出来やうか。春陰陽水。館は霞雨に濡れてゐる鳥だ。岐阜高農の学徒として今や業を終へやうとする彼がその記念樹であり亦新しく詩海にのり出でむとする華かな出発点である詩集「感情原形質」。自分は必つと颯と吹き渡る広野の風のやうにその器にもられた詩情に秘められた何物かを心ある詩士の魂に痕してくれるだらうことを欲する。館は雪國に住む野風だ。彼の詩は玻璃窓の曇りのうちに眺く家鴨の幻姿だ。時には銀砂の蔭に埋もれ、時には梨花の妖粉に酔倒する。浪漫主義であり現実主義であり曳々として雲にのる朝は虚無主義を詩ふ。亦是香として靄のうちに眠る怠惰なる黒猫にも似る。

技巧も要らなければ機智もすてた詩人だ。

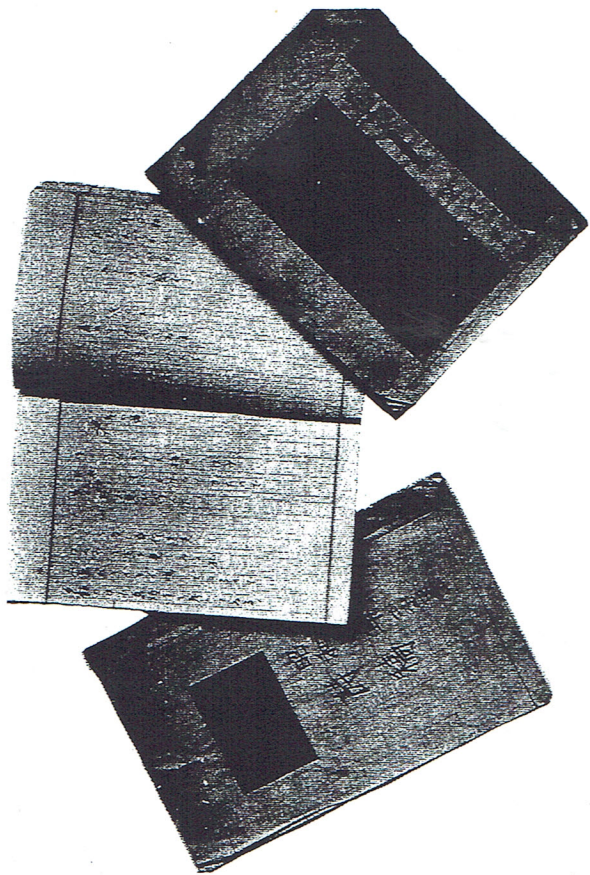
彼は南国人に解せぬ因襲的憂鬱性を見詰めすぎてゐる。それは空間を須走る黒い線の交叉である。

幽かに薫く青白い性慾の屍顔である。

館の詩が館自身であると言ふよりも彼の詩は裏日本の季節が醸す古き酒香であり李の花のその淋しさであるといへやう。

今日迄郷土は彼を見捨ててゐた。風寒くとも春だ。雪深くとも青草は萌える。

偏狭なる郷土人の面前に自分はこの詩集をぶちつけてやりたい心持がする。



驚くべき詩精神の燃焼

一部 英一

(県立図書館振興課長)

魚

詩を書いても飯が食へないと

一昨年 親父に叱られた

なるほど うなづかれる

しかし おれだって人間だ

おれは

すてきな 針をもつてゐる

今に見ろ

でかい 魚を釣ってみせるから

夜

とき鎌が 電光を ふり上げた様に

僕は非常に抗奮を覚えてきた

たましひの いつわらざる 触感

僕は柔かい処女の肉体を尊びます

いつも世の中が

今夜のやうに暗やみなら

僕のすべての意識をぶちまけてもいい

館高重(明治十七年一昭和六年)の生涯と仕事について、私はいままで「金津町史」(昭和三十三年刊 金津町教育委員会事務局)に掲載されている記事以外には何も知らなかった。しかし今回、本誌編集部が企画「館高重特集」にさそわれて、私は詩集「感情原形質」「爪を噛める」などを刊行し、本県の昭和初期の詩界におおきな足跡をのこした詩人館高重の全貌をつたえて、いい、かなりの量の詩作品にふれることができた。いま、私の手元にそろった館高重関係資料は第一詩集「感情原形質」(昭和二年三月五日発行、靖

和 東樹園社・定価老円・六十頁)「爪を噛める」(昭和三年十月十五日発行、倫情、詩美学社・定価五拾銭・三十七頁・タテ19cm×ヨコ13cm)の館高重の二冊の詩集をはじめとして、館が中心的な役割を果たして発行した同人詩誌「群集人間」(第3輯 大正十四年九月刊・8・9・11・12 大正十五年七月刊)五冊、同じく詩誌「詩美学」(第28号 昭和二年十二月刊・29・31・32・33・34・37 昭和四年十二月刊)七冊、そしてさらに、これらに加えて館自身が原稿用紙に詩作品を浄書して仮綴じた「昭和二年詩稿」「昭和三年詩稿」「昭和

しかしね 神様

僕は処女の発光を信じます

落葉

庭隅に また一つ

桜の落葉 動かずにゐる

青空をじつとみつめて

息を殺してゐる

草原

おーばの襟を高く立てて口笛を吹きすまして

がち

霜がれた草原を歩いてゐると

がざがざがざ と気味悪い足音のため

しばらくは驚いて立ちどまつてみる

何んでもない だだびろい草原の上には

重たい水気の風が静かに流れてゐる

明日もまた鋭い霜がふるのだろう

午後の天気はあかあかと枯草の上に燃えてゐる

和四年詩稿」の貴重な三冊もあなこれらの資料を通読して、先ず思うのは享年二十七歳という、そのみじかつた生涯の間に、館高重は実に充実した仕事をしたということである。その詩精神の燃焼の烈しさは、まさに驚異の一語に尽きる。大正八年、福井農林学校に入学。この頃から雑誌「ひとむれ」「フリジャ」を拠点に文芸活動を始めたといわれるが、大正十三年、岐阜高農林学校に入学して、館高重は本格的に詩を取り組む。在学中は「机の中」は、いつも大きな蠟燭を用意して、十時の消灯後は蠟燭の光を頼りに、熱烈な研究が続けられた。「金津町史」といって、二十世紀が伝説を語り、岐阜在住の詩人たちが切磋琢磨しながら、また、一時「金津町六日」に結社を置いた詩誌「群集人間」の編集同人として詩を発表するなど、青春時代のすべてを賭けるかのような文学へのあくなきことのない精進が日課であった。岐阜高農卒業の春、すなわち昭和二年三月五日に発行した第一詩集「感情原形質」は、この学生生活における精

進の成果の集大成であった。「感情原形質」に収録された作品は全部で四十編。序を馬米田静秋が、跋を多賀圭三郎が書いている。作風でまず気付くのは、使用されている言葉が自由で平明であるということである。このことを大正末期から昭和初期にかけての日本詩壇の状況を背景に鑑照してみれば、館高重の文学がまことに卓越した詩壇の時流に反応し、周つていけるのがよくわかる。大正末期から昭和初期にかけての詩壇状況は、いうまでもなく、雑誌「日本詩人」(大正十五年 大正十五年)年刊アンソロジー「日本詩集」を刊行していた「詩話会」が中心勢力で、福士幸次郎、百田宗治、川路柳紅、白鳥省吾などが有力詩人であった。この詩壇の主流は「民衆派」と呼ばれていた。館がこの「民衆派」の影響を受けていたことは、「民衆派」が常に「自由で平明な言葉を旗印のひとつにしていたこと」からみて、まちがいがなだらう。この「民衆派」の活動は、大正末期に至って衰退し、かわつて新

一月

雪がふってから
元気のいい魚屋も来なくなった

置きつ放しの林檎が 櫛の方から腐りかけて
春がそつとしのびこんでゐる

ふところ手

ふところ手して
もうすっかり待ちくたびれてゐると
ふと目についた
豆の花まで
ふところ手して
咲いてゐる

秋の夜

白い小石を拾った

ひとりしばらくみつめてゐたが
すてどころもないので

そつとたもとに入れてかへつた

病んでゐると

病んでゐると
雨のふる日は雨ががなし

晴れた青空の見える日には
歩きたくなつて
涙で心が一ぱいになる

細い手

病床にねてから
ふた月になる
細い手 白い手
ひとりねざめにみてゐると
さみしくなる
なきたくなる

病床

爪で爪の垢をほじる

風として『驢馬』(大正十五年刊)、『赤と黒』(大正十二年刊)、『青空』(大正十四年刊)などの詩誌活動があらわれてくるのだが、これも昭和二年の『日本プロレタリア詩集』と昭和三年の『詩と詩論』の創刊(大正十二年)と日本詩壇に現出した大正末期から昭和初期にかけての局面の転換は全く決定的なものである。この時期は、詩壇の潮流が芸術的・思想的に急激な変化を遂げ、その時代の潮流の他、他ジャンルに生きた行事も進歩的である。『詩と詩論』の巻頭は、詩壇の急激な変化の時代について、詩壇を切りひらいていこうとする、この詩人の野心と自信がみられた。若々しい気持が、出発を告げる決意と共に比喩に表現されていて、ひとりの若い詩人の口吻までがしのばれる佳篇である。高重の『文学の呼吸』にかけた夢が、いかげん大きなものであつたかは、この『風』をみてさへ理解できるといふのであるが、大正十四年九月一日発行の『群集人間』第三

輯の同人語欄の館の文章「がんばつてみせる」もまた、館の尋常でない意欲と情熱のほどを示す一文である。この文章中に、館高重は「死ぬまでがんばる……」と記しているが、矛盾という薄幸の生涯であつたことを思いあわせると、この箇所には、とくにこころ打たれる。第一詩集『感情原形質』の上梓によつて、一躍、新鋭詩人としての声価を高めた館高重は、岐阜高農の助手として、しばらくは岐阜の地に生活し、大正十二年七月、肋膜炎をわずらひ、帰郷した。間もなく小康を得るが、昭和二年一月に詩誌『詩美学』を創刊し、以後、福井詩壇にあって著実に仕事を重ねていつた。昭和二年四月に結婚したが、幸福もあつたが、不幸もあつた。七月に妻が病気で死んでしまつた。この不幸は、高重の人生に大きな転機をもち、以後の文章、詩作に悲愴の極みであつた。生来明朗で快活であつた館氏も、重なる不幸によつて憂鬱は拭へくもなかつた。〈金

津町史)この「悲愴の極み」は、そのまま最愛の妻を失ひ、病活の中で、つぎつぎと生かされてきた高重の胸に刻みつけたた珠玉作品を集めて、昭和三年十一月十五日に第二詩集『爪を眺める』を刊行したのである。序文は辻山桐堂、跋文は岸田信太郎である。三年十一月一日発行の『詩美学』詩集『爪を眺める』の扉には、若くして逝ける妻秋子の霊にまごころとして書かれている。詩集『爪を眺める』には二十七篇の作品が収められている。十行前後の短い作品が殆どである。落ち着いた、静かな観照がもたらす詩的境地には、すきとおつた生命感がひびいていて、八木重吉の詩の世界と似通つものを感じる。編集部からお借りしている関係資料のなかに『日本詩選集・一九二八年版』(昭和三年一月刊・改革詩壇社)があるが、この選集に北川冬彦・草野心平・萩原朔太郎・春山行夫・堀口大学らと並んで、館高重の『落葉』『秋の夜』『細い手』の三篇が掲載されている。『秋の夜』『細い手』は『爪を眺める』にも収録されている。この『落葉』『秋の夜』『細い手』が表出している孤独感と人生の悲哀

は、そのまま最愛の妻を失ひ、病活の中で、つぎつぎと生かされてきた高重の胸に刻みつけたた珠玉作品を集めて、昭和三年十一月十五日に第二詩集『爪を眺める』を刊行したのである。序文は辻山桐堂、跋文は岸田信太郎である。三年十一月一日発行の『詩美学』詩集『爪を眺める』の扉には、若くして逝ける妻秋子の霊にまごころとして書かれている。重忠を看護してくれた亡妻に今更乍ら涙ぐましい気持ちよせている。巻中『蜜柑』の詩など、妻が毎日母に叱られてまでも買ってきてくれた蜜柑を食べ乍らものしただけに面影が深い。なお同著(筆者註「爪を眺める」)の殆ど半は僕の口吟むのを妻が筆記しておいてくれたものである。この第二詩集『爪を眺める』が亡妻の霊前にたむけられたゆえんがここにある。第二詩集『爪を眺める』を刊行した昭和三年の暮になると、肋膜炎が再発、翌年、石川県の温泉に転地療養するなど詩誌活動は中断する。昭和五年九月にいたつて病状はいよいよ悪化し、絶対安静となつた。そして昭和六年二月十四日、ついに不帰の客となつた。

癖

いい詩を書いてみたい
 今夜も寝床の中から頭をつき出して
 明るい電燈の光をみつめる
 眼がだんだんかすれて、何んにも見えなくな
 るまで
 頭がぼんやりして 何んにも考へられなくな
 るまで
 静かに姿勢を保つ癖がついてしまった友達よ
 いい詩が書きたい
 誰にも読れなくとも誰にもわからなくとも
 僕の青春にみごとに色彩をなすりつけて
 僕の柔弱な思索に深い穴を掘りつけたい
 ああ 夜毎にやってくる悩ましい癖よ
 僕はまだ若くてそして元気なんだ

赤蟹

煙草をくゆらし ひとり静かに火鉢をかこみ
 十一月終りのうすら冷めたい夕暮の部屋で
 越前みさきの荒波の下でこれる赤蟹を思ひ浮

べ

いつも粗悪で軽い下宿屋の食事時をまつて
 るのだ
 ああ 食慾よ ふるさとの夕餉は実においし
 くつて
 大根葉の生々したみどりと 父の形見の手ざ
 わりよい僕の茶碗に母が盛り上げた新米の
 かはり
 そしてぶつつりと太った赤蟹の一皿
 そうだ丁度今頃は妹や弟ははしゃいだ明るい
 食卓をかこみ
 僕にも赤蟹を食べさせたいと言ひ合つてゐる
 だろう

海

砂の上で腹這ひになって
 藻草の間にゆれる
 汽船の脚を見てゐると
 不思議な穴があいてしまった
 ああ、悲しい まひるではないか

「亡くなる数日前にボカボカと
 目があった、急に鵜の小鳥がさ
 えすり出した。すると、「おかあ
 さん、いい詩になるよ」と、継母
 にいったが、ついに詩にならない
 でしまった。館高重は最新まで詩
 を忘れなかった。

館高重とのかがわり

美谷 風花子

(三鷹市・俳人)

等(通学していた者を含めて十
 二、三人位だったろうか。その中
 の一人であった館高重(本名孝重)
 は農地主の息子で、福井農林に通
 っていたが、自分よりは一、二年
 上であった。
 当時、そうした田舎の小さい町
 に「フリジア」という文芸同人誌
 が存在していたことはめずらしく、

大正年代の郷里北隣の町——金
 津——といえば、人口五千、戸数
 六百がすべて動かない、ひとつをり
 とした町であった。小学校も一校
 だけで、中等教育を受けるために
 は福井へ汽車通学しなければなら
 なかった。自分が福井中学に在学
 中、汽車通学で一緒だった仲間
 は、商業、工業、農林、私立中

短歌を主とした薄っぺらなもので
 あったが記憶に残っている。陰鬱
 な裏日本の風土がそうした文芸的
 雰囲気醸成するものであったの
 だろう。同誌がどういふ同人の顔
 触れであったか、それに館が関係
 していたのかどうかはわからない。
 その「フリジア」が廃刊になって
 から、館が「ひとむれ」を発刊し
 たのだらうと思われる。自分にも
 何でもいから書いてみるという
 ことで、最初に何か堅い詩を出し
 たのが、自分と彼との最初の文芸
 的な関係だったかと思う。この「ひ
 とむれ」の同人としては、まだ現
 存している庄山信太郎君や亡くな
 った林千鶴君がいたと思うが、館
 はまた福井で発行されていた「朱
 実」誌の連中や三国の同好家とも
 交っていたようであった。

館といえば、今でも彼の小柄で
 猫背で、頭髪をボサボサにしてい
 たのを思い出すが、時々当時の小
 学校の裏山の公園に登って、話し
 合ったこともあった。内容はもう
 忘れてしまったが、ただ、いつか
 口語短歌の話が出たとき、彼があ
 る会で発表したという

神様の苦心のほどがしのばれる
 千ある女の所のまるさよ
 の詩を面白半分には自慢したこと
 だけは覚えていて、
 秋のある年の夏休みには、
 彼が東寺坊のある三国の浜から海
 岸沿いに夜道を歩いて、越知山
 に登ろうと言ひ出しても、もう一人誰
 れかとも誘ひ実行したことがあつ
 た。提灯を籠り飯を携えて、三国
 線で三国まで行き、夜道を話しな
 がら歩いたわけ、朝明けの越知
 山に登りはじめたところは三人とも
 もり相当にくたびれていたが、残
 鶯の音が爽かだったことが思い出
 される。自分はこの行を「越知紀
 行」と題して一文を書き、中学の
 国語の先生に差出したところ、校
 友会誌の「明新」に掲載してくれ
 たのを覚えている。

またこれもある夏休み中のこと
 であったが、小学校の教室で「詩
 作品展覧会」というのを聞くから
 手伝えという。詩は読んで鑑賞す
 るものだから、展覧して見せるも
 のではないだろうという、詩の
 モチーフには、それぞれ色彩感と
 か量感を伴うものであるから、詩

思ひ出

貧しいわたしにも思ひ出がある
それは蜜柑に就いてである

死んだ妻は蜜柑を愛しました
そして蜜柑を生かしました

今日の思ひ出は 涙は
御霊に蜜柑をそなへさせた

今日の蜜柑は大きい
おいしそうな色艶である

朝

裏庭のはねつるべの縄が切られてゐる
まつ青な空が弓なりになつて
竹籬の上に落ちかかつてゐる
霜柱を蹴ろうとして
すつぽり下駄を切らしてしまつた

稿をその主筆に託すは、高重が在学中に出したのでは
大小の紙を描き、現する
初めの試みである。自分
もその形式で「二二」は、彼とは休暇のときに会う位だ
彼の二十篇ほどの作品は、つたが、彼が高重を出て帰郷して
小学校の一教室に展示したもので、がらのはだと思つた
ある。町の「二、三」を宣伝し、れを雪請れと歌題として、
ラマラ貼つたりしたわけだが、するからまた向人として努力せよ
般の形報告はほとんどなかつた。といつてまたよう思つた。その後
は、おもしろい。高重時分から結婚関係は、
彼が、高重に進学して、七か、
いふは、
繪、
が、
か、
米田は小学校だけしか出ていない。ていたよな気がするが、また自
が、詩才を持った男であつた。分、
紙の図案も自分が描くことになり、
詩も「片假名詩集」が「心象詩」が、
篇」とか題したものを載せ、
だけはある。また、
また、
寄せてくれたこともかすかに憶え、
がある。この「群集人間」には、
は、
館の第一詩集は「感情原形質」、
という書名で、三十篇ほどの短詩
をまとめたものであつたが、これ

逝 春

草むらに蝶々が休んでゐる

つめたい手

いちけてしまつた
つめたい手を
力一ぱいにぎりしめてみる。

ああ こんなにひえてゐたのか
身体の隅々まで
つめたさがこたえる

病ひに

病ひに心がたかぶつてくると
何も彼も忘れて
ひたすらに
救はれなくなる
神様と呼びたくなる

時どこかの出版社で募集選定して、
出した「日本現代詩集」には、
一篇載っている筈である。手許に
「フリジア」「ひとむれ」「雪晴れ」
「群集人間」の諸誌や「感情原形
質」「瓜を眺め」が残存していれ
ば、彼の詩集の内の各冊とも紹介で
きるのだが、
おいたそれ、
で家屋とともに焼失し、
としてはた、
いるだけである。
彼は一人息子だつたと思つたが、
その後館家は継続きの人が継がれ
ているようであるから、
しそれらが保存されて、
わすにはいられない。
は四十余年前の北陸の小さな田舎
町に一つの新しい文化の灯を点じ
た一人であり、
筆についての先達であつたと思つ
ている。

秋海棠にも似たひと

馬来田 静秋

(福井市、詩人)

こどもも秋海棠の花が開きけし
めた、
つた、
淡紅色の花弁、うこん色の花芯、
ハート型のしつとりと水をふくん
だ翠葉、紅色の葉葉。華やかでは
ないが、
私に薄倅の詩人館高重にそれに
似た面影を偲びながら遠い日の想
い出を辿ることがある。

蜜柑

みかん
みかん
今夜の蜜柑も大きいぞ
みんなで蜜柑にお辞儀をしてから
食べようぢやないか

追憶

仲秋ともなれば
私達一味の少年等相集まりで
裏庭から裏庭へ抜けて
柿、栗の屋敷をまわり歩き
お互いにいたく不安を感じながらも
毎日、たのしい悪戯の季節であった
今日私は、柿や栗の持主となって
赤らみゆく果実を見守りながら
かへらざる少年時代の追憶を深め
時々悪戯に染めてくる少年等を
にくめないものだぞ
しみじみ思ふ

青年の頃足羽河畔九十九橋の北
詰に野舎と言うレストランがあつ
た。川に面して日いてらすのある
洋風建築、窓で出してくれたア
イスクリのうまさは忘れられ
ないものの一つであった。

大正十一年の九月、私達はこの
店で、草紙短歌会と銘打って口語歌
の集りを開いた。主宰は友人の河
原忠彦、村井武生、島崎圭一等詩
人、編者「編者」の同人達で当日は十数
名の参加者があつてますますの成
功であった。

集まった歌のなかに唯一首、
狂い女が
共同便所を腰巻を
洗つていました立っていました
と言つた。その作品が話題
を賑わしたが、その作品が箱高重
に知られたことには私は彼に強い関心を
抱くようになった。
以後彼が「ひとむしれ」を出して
リヂヤンを創刊し、更に岐阜高農
での学生生活の余暇に「群衆人間
」を続刊するようになった。それから始め
て彼の交友が進められることにな
つた。
當時彼の生家は足羽山の中

にあつたが、学生服の彼が長い石
段をあえぎながら訪ねてくれるよ
うになつた頃は、滝波善雅、福島
善太郎、安達実積、永井善太郎、
等松一夫、多賀圭三郎の諸君も、
いつとはなしに古びて薄汚れた私
の書齋に集つて、文学を論じ、詩
を語り、レコードを鑑賞するなか
で、彼は叱り勝ちに彼なりの意見
を述べていたが、決して自説を固
守するような態度はしなかつた。
勿論学生らしい明るさには乏しか
つたが、彼には詩人的な気取りが
なく、素直な平凡さが私達には好
感をもてた。

処女詩集「感情原形頌」は当初
岐阜の詩魔詩人会から発刊する予
定だったが、岩間純君との私情の
衝突から取り止めて私にその協力
を求めて来たので、私は多賀圭三
郎と協議の上発行所を私達の「果
樹園詩社」で引受け、私と多賀と
がそれぞれ序と跋文を書くことにな
つて、その由を彼に知らせた。他
非常に喜んでくれた。

岐阜高農を卒業し助手として勤
務して間もなく、彼は薬餌に親し
むようになった。そして最愛の新

公園

ひさしぶりに来てみると
遊動田木や木馬にのつかつてる子供達の靴
下が
みんなまつくろに汚れてゐた

夜雨

障子に映つる長い長い影よ
さみしく爪を切つてゐる

菊を作る

菊を作ろうと
菊の苗を植えたのですが
菊作る術を知らうとしなかつたので
ぼうぼうと花が咲き初めました。

私のする事みんなこれです
今日も母上に
結婚の話を上上げた
ひどく叱られました。

私の子供は結婚三ヶ月で、い
よいよ「私」を眺める。世間
に於いて彼の詩壇は一段と高
れ、詩人としての存在を確立し、
大々々々出てゆくようになって
た。

私が始めて金津町の彼の自宅を
訪ねたのはその頃だと記憶してい
る。彼は苦蒸した石籠のある庭先
に面した座敷に招いて彼の動

静や抱負などを語り合つたが、病
に疲れきつたその容姿に私は痛々
しい思いで慰めの言葉を残して家
を辞したが、彼は態々軒先まで見
送つてくれた。

私は今一度彼の住居の方を振り
返つたが、もうそこには彼の姿は
なく、黄昏近くのをさら寒い街並
には魚を焼く匂が幽かに流れてい
た。

全国詩歌人の 短冊色紙展開く

「微力ながらも何か仕事をし
たいと考へた末、膺せた男、
何が出来るか見物なれど、全
国各地の親交ある詩歌人諸兄
の援助を得て……」と、
「詩美学」28号の巻頭に、箱
高重氏自から開催の弁を記し
ている。昭和3年12月15日に
自宅を会場にした写真がアル
バムにあり、病弱の身を忘れて
て活動した様子が偲ばれる。

